# 大阪■■哲学学校■■通信

No.45　2012.2.23.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2012
【郵便振替】01170-1-81313
【E-mail】oisp@mac.com
【Home Page】http://oisp.jimdo.com/
【代表者】 山本 晴義（校長）
【発行者】 平等 文博（運営委員長）
【編集者】 平等 文博
【連絡先】
657-0037 神戸市灘区備後町 5-3-1-1001
平等気付
電話＆ FAX:078-856-2474

## ２０１３年を迎えて

山本　晴義（校長）

### Ⅰ　バラク・オバマ

２００９年１月、オバマ米大統領がスタートしたとき、就任式で手を置いて宣誓したのは、あのリンカーン元大統領が愛用した小さな聖書だった。

今度２期目の就任式で手を置いた一回り大きな聖書は、２０世紀公民権運動を行ったマーチン・ルーサー・キング牧師が使った聖書だった。

そして、「わたしたちがだれしも平等に創造されたという自明の真理」こそが、今でも導きの星である」と演説した。

レーガンに代表されるグローバルな「新自由主義」、ブッシュのイラク戦争に象徴される単独行動主義･先制攻撃主義、２００８年９月リーマン・ブラザーズの破綻による「ドル時代の終焉」からの脱却を目ざして、人民大衆の熱狂的な支持のもとにオバマが掲げた「チェンジ」「グリーン・ニューディール」が頓挫し、貧困層は現在全人口の１５％にあたる史上最悪の水準にまで拡大、１％のウォール街を占拠せよ（オキュパイ）の運動が全米に広がった。

２期目の政権の課題としてオバマは、銃規制と移民対策の改革、軍事・外交問題では「軍事力と法の支配を通じて国民を守り、価値を擁護する」「他国との違いは平和的に解決する。また世界中に強力な同盟関係を広げ、その『要』であり続けることをアジア、アフリカ、南北アメリカ、中東の民主主義を支援する」と述べている。

### Ⅱ　世界の流れ

確かに、就任式で語られたオバマの精神は民主主義の星である。けれども野党共和党が下院で過半数を握る中、もともと現実の政治の場で妥協的になりがちなオバマ政権の２期目について、危惧する声が高いことは見落とせない。

事実オバマは第２期を迎えて、「アジアへの積極的関与」を謳う外交政策を鮮明にし、米軍兵力のアジア地域への重点的配備と対中国の軍事的包囲網を形成する動きを示している。

私はこの通信で、何年か前から『２１世紀と「多極化」の時代―「パクスアメリカーナ」の

崩壊』という文章を書いてきた。

そして去年は「外部に仮想敵を持った軍事同盟に代わって、外部に開かれた平和の地域共同体が世界各地に発展していることを指摘し、「ドル機軸」、「ユーロ機軸」の破綻とBRICS（中国・インド・ブラジル・ロシア・南アフリカ）など新興国の発展、先進国Ｇ７・８に代わるＧ２０の力を強調した。あの「アラブの春」、１％の支配に対して９９％が闘った「オキュパイ」、「中南米カリブ海諸国共同体」「ASEAN共同体」の発展が拡大されなければならないことを主張した。

Ⅲ　そして、安倍政権は

そうした世界の流れの中で、日本では「日米同盟の強化」と「改憲」を正面から掲げた第二次安倍内閣が発足した。第一次安倍内閣で「戦後レジームからの脱却」を掲げた安倍政権は、尖閣諸島をめぐって外部に仮想敵を持った最悪の「日米新軍事同盟」、「集団的自衛権の行使」、中国に対抗できる軍事強国化を指向し、「従軍慰安婦問題」に反証し、かつての中国アジア侵略を「アジア解放の聖戦」とし、３・１１以降の原発再稼働反対、オスプレイ配備反対運動を攻撃し、核武装を望んでいる。

小生、残念ながら、この重要な昨年６月末以来、腎臓病と高齢のため、校長としての役割を多々果たせずご迷惑をおかけしました。お詫び申します。この拙文も不満足な資料、分析であり、後日補足させていただくことをお許し願います。

## 〈知の歴史〉入門講座

於・尼崎労働福祉会館　参加費・各回千円（学生など五百円）

## 「ヘーゲル『精神現象学』を読む」（最終シリーズ）

## 講師・田畑　稔さん（本校参与、大阪経済大学教授／哲学）

【講師より】第１回目が2005年10月８日なので、今年で８年目、全２４回の最後をかざる３回シリーズになる。19世紀前半に活躍したドイツの哲学者ヘーゲル（1770-1831）の『精神の現象学』（1807年）は、難解で知られるヘーゲルの中でももっとも難解な本であるが、ヘーゲル哲学の誕生を告げる記念碑的な作品であり、哲学の全古典の中でも屈指の傑作である。また『精神の現象学』には、我々が21世紀的地平で思想を再構築するに際して、「兆候的に」読み取るべき貴重な構想が無数にちりばめられている。

今まで参加していなかった人もこの機会を利用して挑戦しよう。テキストは入手の便宜を考えて樫山訳（平凡社ライブラリー）で指示しているが、他の金子武蔵訳（岩波書店）、牧野紀之訳（鶏鳴出版）、長谷川宏訳（作品社）などすでにお持ちの方はそれを利用してください。

●第２２回「芸術宗教」（古代ギリシャの宗教と芸術）について
２月９日（土）１時半から５時半　尼崎労働福祉会館
樫山訳（平凡社ライブラリー下）２９４頁～３３９頁

●第２３回「啓示宗教」（キリスト教）について（同上、３３９頁～３８２頁）
２月２３日（土）１時半から５時半　尼崎労働福祉会館

●第２４回「絶対知」（哲学知の地平）について（同上、３８３頁～４０８頁）
３月９日　（土）１時半から５時半　尼崎労働福祉会館

# ２０１３年の新年に際して

泉　史（ふびと）（会員）

新年あけましておめでとうございます。

昨年は短歌の方で、賞をいただきました。７月には「山川登美子記念短歌大会」で「河野裕子賞」の第１回目を、１１月には兵庫県上郡町の「短歌大会」で優秀賞にあたる「入選」をそれぞれいただきました。平等さんからその作品についてのエッセイを依頼されました。これは望外の大きな喜びです。と言いますのは、短歌の世界では、―俳句の方でも同じだと思いますが―また現代詩の分野でもそうなりつつありますが、実作者＝読者が一体化しております。口の悪い批評家のひとりは「短歌や俳句人口も年々増加して国際的な詩型にまでなってはいても、読者層の一般的な広がりは無く、詠み手が即ち読み手という結社的次元をななか越え得ないのである。」（１９９２年、現代詩手帖４月号）と指摘されています。今回のように、実作者のいない、いわば純粋の読者に向けて書くと言う機会は、短歌の世界に住みますとほとんど、あるいはまったくないのです。それが大きな喜びの一因です。

ところで、そう言う読者は、今回の短歌作品の自歌自解などの内容を、もし、みなさまが短歌や俳句の実作者をおこなっていられる方にお話しをなさってもおそらく不愉快な反応があるでしょうし、機嫌を損ねるものでしょう。あるいは、聞いていても聞かないふりをして無関心のポーズを徹底してとられるのに出会い、きっと面喰らうでしょう。丸山真男が「日本の思想」でのべられた〈たこつぼ〉の事態なのです。

さて７月に評価された短歌を仮にＡ、１１月にあたるものを仮にＢとします。そしてエッセイ風に自歌自解して参りましょう。

Ａ、「クラリネット協奏曲が球形のひびきに階をくだるとき在り」

Ｂ、「音のなく萩は落花をくりかへしごろり横寝でけふ眠るべし」

Ａについて。

階段をおりるときに、クラリネット協奏曲がながれて来た。内容はごく変哲のないものです。ところでクラリネットと云う楽器は１８世紀にドイツのマンハイムを中心にひろがり広く普及し、オーケストラに取りいられるようになりました。いま、オーケストラでは当たり前の顔をしていますが、ざっと二百年の経緯があるわけです。クラリネットは高音、中音、低音のそれぞれの領域でさまざまな表情を見せます。クラリネットのその真価をはじめて発揮したのが、モーツアルトです。彼は１７９１年１２月４日午前零時５５分に亡くなったというのが知られている事実です。ただし遺体が共同墓地に埋葬されたため、遺骨は現在でも不明です。

その１７９１年を晩年としますとその年の１０月に書かれたのが、クラリネット協奏曲です。モーツアルト唯一のクラリネット協奏曲で「イ長調　Ｋ、６２２」と名がついています。演奏は約３０分くらいです。日本では、１９４５年以降、知られるようになりましたが、クラシック音楽の日本人クラリネット演奏者が少ないため、普及に手間取りました。いまでも演奏は外国人の録音が主流で、カール・ライスターが多くの録音を残しています。モーツアルト時代の

「バセット・クラリネット」は低音に特徴がありますので、現在は女性のN1iAUが第一人者です。FMで聞かれる注目演奏家です。日本人の演奏家は両手の指に幾人かはいるぐらいしかいませんので、CDやFMで聴く機会しかありません。クラリネットはむかしチンドン屋さんが吹いていた楽器なのですから親しみはあろうかと思いますし、中高校の吹奏楽でも見かけるので聞いているわけです。

モーツアルトのクラリネット協奏曲は、第３楽章まであります。特に第２楽章アダージョは、モーツアルトに死の予感があったのでしょう、諦観に満ちていまして、クラリネットが味わい深い旋律がたっぷり聴かせてくれます。一度聴きますと忘れられない旋律です。３５歳で亡くなった夭折の痛ましさは、同じ時期の「レクイエム」ニ短調　が有名ですが、負けずとも劣らない作品だと思います。

短歌の選をされた方々のうちには、そのようなファンがおられるのかも知れません。

短歌のなかの「球形」と云うのは、第１楽章がアレグロでなにかと対話して展開し、それが玉が転がるようでしたのでそう書きました。

Ｂについて。

歌意は、萩の花が散るのを見ているとごろりと横寝してたくなった、と言う他愛ない内容です。

ところで、「萩の花」と「寝る」という組み合わせには、下敷きがあります。

江戸時代の１８世紀後半の俳人、松尾芭蕉にとても有名な俳句があります。それは、〈一つ家に遊女も寝たり萩と月〉という俳句です。

芭蕉の「奥の細道」で出て来る俳句で、芭蕉が日本海側に往き、“荒海や佐渡に横たふ天の川”と詠んだ俳句のすこし後に出て来るものです。遊女も寝たりと言うのは今日の研究ではフィクションだったらしいのですが、それが解明されるまで人びとにとても親しまれまた敬愛された俳句だったのです。

芭蕉の身辺には、女性の存在がほんどありません。そのため、芭蕉に子どもがいたのかあるいはいなかったのかさえ、確かなことは解っていないのです。女嫌いではなかったようで、弟子のなかにも女性弟子がいて、芭蕉と連句を他の人たちと一緒に詠んでいたりしています。江戸時代もそう思われていたので、この〈一つ家に遊女も寝たり萩と月〉の句は、珍しさもあったのかもしれません、長い間、著名だったのです。

萩は、赤紫の花と白もあるのですが、秋早く咲き、秋の訪れを告げます。古来からの「秋の七草」のひとつです。成長は著しく、２メートル以上にもなります。花が終わりますと、刈ります。庭園ですと萩の刈りこみが美しさの基本になります。美しく刈らないといけないのです。

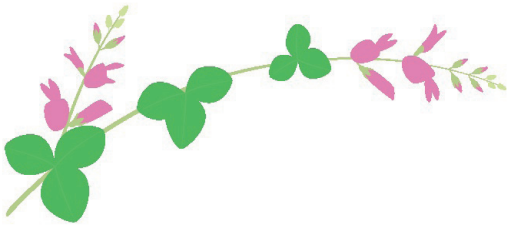
ごろり横寝しつつ、その刈りこみでも考えているのかもしれません。秋の萩の鑑賞は二度の御勤めがあるのです。

江戸時代の１８世紀なかごろ、与謝蕪村には〈小狐の何にせむけむ小萩はら〉と言う代表句があります。１９世紀の俳人、小林一茶には〈萩散りぬ祭も過ぬ立仏〉という句があって、明治の正岡子規には〈白萩のしきりに露をこぼしけり〉なる写生句があり、これもまた有名です。

ちなみに萩が散りますと、当然ですが、実が莢のなかに入ってすぐ出来ます。

この実もすぐこぼれて地に種を下ろします。

さて、俳句では、上のように「萩」と「寝る」の組み合わせは、名作がありますが、短歌では少ないのが、この歌を選者に印象的にしたらし



いのです。もちろん、選者に他の意思もあります。自然と触れ合う事象をもっと短歌の制作に多くに詠んでほしいと言うものでしょう。それには動機があるのです。日本中がいま猛烈な勢いで都市化をステップごとに進めています。第一ステップは村同士の合同によって新都市になることです。日本中から村の名称を持つ行政がほとんど無くなりました。つぎの第二ステップは、インフラを整備した都市化ですので、村の敷地内に都市風の住宅ががぜん増えるわけです。新住民と一緒に村おこしするのはその例でしょう。日本中が都市になります。景としては、区別のないものです。選者のかたがたの意思には、消えつつある自然の具象と和解した、と言うかあるいは、融和した、と言う自然詠の増加をもとめているのでしょう。それだけ都市化なる大きなうねりに呑み込まれた歌が多いからでしょう。歌を詠んでいる人たちは呑み込まれている意識は皆無でしょうから、広い視野・パースペクテイブを時間・空間にもつ選者には、選歌することで、こう言う誘導をしているのです。そうしないと現代短歌の世界が数年後にはせまくなってしまうからです。

けれどもわたくしが思うには、短歌の世界はひとつのフィクションの世界です。フィクションですが、根底に真実追求があります。家族詠の歌が盛んに求められるとき、フィクションの歌の向こう側の現実には、家族の結びつきの希薄化があって、民衆自身は人に言えない不安があるわけです。家族のありかたも変容しているのですが、それが人に推薦できる明るい希望をいまは決して与えないのです。鋭い研究者のみがその変容する事実から実証して学を立てようとしているのです。歌を詠む人には思いこみがありますから、読者は表現された歌にだけ囚われると、振り回されるだけでしょう。

文章の美しい短歌を是非、鑑賞してくださることをお願いしてこのエッセイを終えます。

（２０１３．１．１）

## 今、中国の政治と経済、そして社会は…

# *中国の民族問題と民主化運動の現状*

## ３月23日（土）13:30～

於・尼崎労働福祉会館（阪神尼崎駅下車、駅西の南北道路を北へ徒歩１０分）

## 講師・劉 燕子さん（翻訳家・文学者）

## 特別ゲスト・王 策さん

**（スペイン亡命中の海外民主化運動のキーパースン、政治学博士）**

中国シリーズの第３弾として、チベットを初めとする中国の民族問題と、民主化運動の現状についてお聴きします。また今回は劉さんのご紹介で、ちょうど来日される海外在住の民主化運動のリーダーのお一人である王策さんにも来ていただけることになりました。王策さんについては劉さんが､共著で出された『反旗―中国共産党と闘う志士たち』（扶桑社、2012）に書いておられます（ただし、この書名に関して劉さんは、「私には不本意ですが、内容には自負があります。劉暁波さんの言うように『私には敵はいません』」）と言っておられることを申し添えます。貴重なお話が聴ける機会ですので、ぜひご参加ください。

# 融通念仏宗について

橋本　直樹（会員）

融通念仏宗という仏教の一宗派について知っている人は少ないのではないだろうか。あるいはそれを仏教系の新興宗教の一派ではないかと思う人もいるかも知れない。しかしながらこの宗派は、日本仏教の主要十三派の一つに数えられており、その開祖とされる良忍にとって、浄土宗の開祖である法然は孫弟子にあたるという、ある意味では日本で最初の浄土系宗派ともいえる仏教宗派なのである。

ただ、大阪の大念仏寺を総本山とするその宗派の末寺は、大阪のほかには奈良、京都、そして兵庫の一部に限られ、信者は十数万人と、同じく浄土系の時宗などと同じ位の規模の小教団であり、その知名度は時宗にも及ばないのが現状である。

そんな、所詮は取るに足らないような融通念仏宗という宗派を、私がここで紹介するのは、この融通念仏宗が、浄土系でありながらその枠を超えた特異な宗派だからである。詳しいことについてはまた別の機会に述べるとして、ここではそのことを端的に示す例を３つ挙げておこう。

まず１つ目は、浄土系でありながらその宗派が奉じている根本経典は、いわゆる浄土三部経ではなく華厳経と法華経であって、浄土三部経はあくまでもそれらに次ぐ経典に過ぎない、ということであり、２つ目は、その本尊が十一尊天得如来という仏画であること、そして３つ目は、その宗祖が先に挙げた良忍のほかに法明と大通、合わせて３人もいて、彼らの生涯に代表される教団の歴史がまた数奇なものだった、ということである。

そしてさらに私が強調しておきたいのが、その教義である。これもまた具体的には別の機会に論じるつもりだが、それは簡潔でありながらよくまとまっていて、しかも実に奥深いものとなっており、それは現代でも通用する普遍的な教義とさえいえるのだ。

とにかく私は、自分がその信者になってもいいと思うほどに傾倒しているこの融通念仏宗という宗派のことを一人でも多くの人に知って欲しいと思って止まない。みなさんも融通念仏宗について一度調べてみて下さい。

総本山大念仏寺（上）と融通念仏の教えを民衆に説いた無言劇「壬生狂言」（下）

# 傷　岸

船曳 秀隆（参加者）

雪の華束を積んだトラックは
翼の溶解工場へ向かった
赤子のあつめた貝殻のいのちにも　雪が降りしきる
白夜を降りしきる　翼たちの叫びが
美しい透明な橋を　わたっていく
この雪は　ゴミになるのか？
死人は　ガレキになるのか？
雪は天使の涙
遥かクズとガレキを大河に換えて
雪を唇で許していく
翼が雪を被い　貝殻に憑く祈りをひからせる

秋溶ける月の河
アノ日ノ恋ハ私ニハ見エナイ
その傷は
恋とは呼べないが
君の眉の下でいつまでも天使をかかげた
はかない春を覚えるまでに
枯れた春を知るまでに
貝殻の炎が溶ける
傷つけずには悟れない
天使は　人が近づけば近づくほどこわれていく
差し伸べる指先に遠く触れただけでもね

僕らに伝わった　天使の影
雪からこぼれる　貝殻の血の
温もりを　敷き重ねる
月に張られた十字架に縛られる
手をひそやかに　繋ぎ合う
君が十字架に束縛されないように
鎖を解く涙を捕らえる
積まれつづけた微石が落ち
生まれつづける微涙の煙に導かれようとも
その痛みすら君に捧げながら

【近況報告】

こんにちは。うめきた芝田町から梅田茶屋町に転居しました。近くにいらした時は是非お立ち寄りください。

コールサック社の雑誌コールサックに詩を複数編寄稿しております（小詩集「詩人を飼う」「百年の爪」等）。紀伊国屋やジュンク堂等、お近くの書店でお求め下さい。

朗読の会にも度々出場しており、中尾彰秀氏のＣＤにも詩の朗読を多数収録して戴いております。

又、毎月一回京都御所での母主催の茶事の裏方の手伝いをしています。母は美術館に出展出来る程の茶道具を半世紀以上かけて一人で集めた収集家で、車に茶道具を山積みして梅田から京都まで毎回運んでいます。茶道雑誌二〇一二年七月号茶会記・消息の欄（一五〇頁）に掲載。やすいゆたか先生の奥様の保井晶華先生の軸も二階の席に何度も飾らして戴きました。京都御所の茶事にご興味ご関心がある方は、MAIL:dewey20002007@yahoo.co.jpまで。母は何流にも通じておりますし、ちなみに私は青年部に所属させて戴いております。

最近の私は作曲に目醒め、四時間で66曲作曲した日もあります。映画音楽のようなクラシック調の詩的な曲ですので、こちらも言って下されば、ＣＤかＭＡＩＬ添付でお渡し出来ます（作曲作品タイトル「宮殿の月」「組曲水晶音楽」「永久凍土の扉」等）。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

# 小林秀雄『モオツアルト』批判

義積　弘幸（会員）

大学４年生の頃、卒業論文を書くにあたって、私は、小林秀雄を対象にして、特に「美の問題」について、『モオツアルト』について論じようと思っていた。そのあと、しばらくして「美の問題」についての下書きを、担当の吉田富夫（現仏教大学名誉教授・ノーベル文学賞受賞作家・莫言の訳者）に、二度持っていったが、さっと読んで、すぐに突き返された。そんなことより、早く就職先でも見つけろといった口ぶりだった。しかし、小林秀雄全集を読み返しながら、小林が、一番力を入れていたもののひとつが、ドストエフスキーだと気がつき、彼の『罪と罰』に対象を替えた。(他の小説も読んだが)

前置きが長くなったが、あのあと、もう30年も経つのだが、未だにモーツアルト（特に、小林秀雄の）に対するこだわりが消えていない。私が、小林の批評が好きだったのか、モーツアルトの音楽が好きだったのか、わからないのである。5年ほど前､「40枚のCD･別に「魔笛」･「フィガロの結婚」付き。9800円・輸入版」を買ったが、それほど、好きなのだ。

今は、ピアニスト・作曲家の高橋悠治の『モオツアルト』批判を読んで、小林の『モオツアルト』に違う光をあてられ、かなり感じ方も替わってきたが。

音楽批評家でもある高橋は、次のように述べている。

「ある冬の夜、大阪の道頓堀をうろついていた時、突然、このト短調シンフォニー（４０番・第４楽章）の有名なテエマが頭の中で鳴ったのである。」この一行は、以後の日本の音楽批評のパラディグマになった。誰もが音楽との「出会い」を書くことで、音楽論に替えようとする。そのとき、自分をできるだけあわれっぽく売りこむこともわすれない。」(「痛切な」経験)

これは、高橋の小林批判のみならず、それ以後の多くの音楽批評家への批判であった。さて、高橋が批判する中に吉田秀和も入る（後出）と思うので、そのことを書くが、(NHKアーカイブス「吉田秀和をしのんで」）吉田は、小林の『モオツアルト』が出たとき、ショックを受けた。「啓示」とさえいえると言っている。しかし、音楽的教養をもった「自分の方が、もっといいものが書けるだろうと思った。小林の文章は問題をいろいろ出してくるのだが、あっちへいったり、別なところに飛んでいったりで、カデンツァがない。カデンツァというのは句読点なのだが……」と言っていた。そして、その後、書かれたのは、「モーツアルト　出現・成熟・創造」(昭和22年・「音楽芸術」）であった。小林のが、21年だから、翌年である。確かに、小林より、客観的なようだが、面白いかどうかは、わからない。批評というぐらいだから、面白いかどうかで決めてはいけないのではあるが。

ところで、高橋悠治は、茂木健一郎との対談（インターネット）で、小林の流れを受け継いでいる音楽評論家（吉田秀和、遠山一行、船山隆が代表・後出）は悪い面を受け継いでいる。エピゴーネンであるという。それに対して、茂木が「先駆者（小

林）とエピゴーネンは違う」と言い返すが、高橋は「小林自身がエピゴーネンだ」と答えている。小林の文章を、よく調べれば、スタンダール、アンリ・ゲオン（援用がかなり多い）、P・J・ジューブなどの文章を、かなりパクッており（典拠もいわず）、その点、エピゴーネンなのかもしれない。つまり、高橋は、小林が音楽批評の源流だと言いたいのだろう。そして、それも悪い方の。

しかし、小林は「僕は音楽家ではないから。僕は専門の音楽批評家と争おうとは少しも考えていなかった。あれは文学者の独白なのですよ。」と坂口安悟との対談「伝統と反逆」で述べている。そのあとの音楽批評家は、それを知らずに影響を受けたのだろうか。音楽批評も、やはり言葉を使わざるえないから。

安悟は小林に対して「お前は文学をやらせれば、日本で一番偉い奴だよ。それを音楽だとか、画だとか……。」「文学者、または人間、小林秀雄がモオツアルトを解するのではなく、小林秀雄が「音楽的に」モオツアルトに近づこうとしている」とか言っている。後者の言葉に、小林は、先のような返答をしたのだが。

次に、大岡昇平が、「なぜ、ああなったのか。（暗く悲しいモーツアルト？）」と尋ねている。小林は、それに対して、「どういうわけか、ああなってしまったんだ」としか答えていない。「母上の霊に捧ぐ」というのと関係しているとも想像されるが。河上徹太郎は、「モーツアルトの宿命の調性ト短調を鳴らしたかったのだ」というが、モーツアルトの聴きなれた代表作で、モーツアルトの短調の曲は、交響曲では、25 番と 40 番。ピアノ協奏曲でも、20 番と 24 番だけである。確かに、良く調べると、ミサ曲などほかにも短調の曲はあることは確かだ。しかし、ほとんどが長調なのである。（俗っぽいことをいえば、「ピンクのモーツアルト」なのである）つまり、小林の批評は、大岡のいうように、思ったより暗いのである。小林は、「音楽の達人が音楽に食い殺される図を描いた」というように。（「伝統と反逆」）

今度は、30 年前の私の体験にもどろう。それは、私が、なぜ、『モオツアルト』を推したのかは、小林が「何故俺は音楽が好きだ、画が好きだということを、文学で実証するだけの勇気がないのだろう」と言っていたからである。「文学者における音楽批評の先駆者」に思えたのだろう。私も好きだったモーツアルトを如何に料理しているか、そこに存在理由を感じたからだ。とにかく、吉田秀和が、まず「啓示」と感じたと言う『モオツアルト』を小林は、書いたのである。これが、よかったか、悪かったかは後にして。

私は、20 年ほど前、本気で、文学研究会で、小林の『モオツアルト』について発表しようとしたことがある。（もう、その時は、病気になっていたが）まず、関連資料を集めて読むこと、作品に出てくる主な曲の楽譜を集めること、作品に出てくる曲をテープに吹き込むこと、本文を熟読すること、資料を作ること（さすがに、ここまでは、できなかった）しかし、発表当日、確実に京都まで行けるかどうか、自信がなかったから、断念した。やはり、発表は無理だった。けれども、発表していたとしても、モーツアルトの音楽を紹介するだけだっただろう。小林 VS 安悟についても紹介するだけだったろう。とにかく、その時には、結論が見えなかったのである。

さて、話は、前後するが、高橋悠治の批評は、正確には「小林秀雄『モオツアルト』読書ノート」というエッセイである。初出は、『ユリイカ』（1974・10、特集　小林秀雄・青土社）である。これを持っていたのは、小林秀雄文献を、よく集めていたからである。しかし、初めは、それほど重要な文章とは思っていなかったようである。高橋は、「みんながほめるものだから、批判的な文章を書くことになった」（茂木との対話）と言っている。

高橋は、小林の『モオツアルト』論を「十一の断章の最初のひとつで、言うべきことを言い

つくしてしまう。あるいは、言うべきことが何もないことを告白してしまう、と言おうか。」と述べている。この中でも、「個性と時代との相関を信じ、自己主張、自己告白の特権を信じて動き出した青年たちの群れは、彼（ゲエテ）の同情を惹くに足らなかった。」という部分は、重要であると思う。

それは、このあと、「『罪と罰Ⅱ』に続いて『ゴッホの手紙』が書かれるからである。

ここに来て、小林は、日本でも「自己主張、自己告白をする青年達の群れ」を感じていたのではないだろうか。「近代人というもの、近代芸術というもの、それがもう何か間違った道にさしかかって来ているに違いない。そういう気がして仕方がないのだ。」（伝統と反逆）とも言っている。それに対して、ゴッホは、精神病の発作の間に絵を描き、また、同時に、弟テオに、たくさんの手紙を出し続けていたからである。それは、精神病との同時進行であった。それは、ルソーの晩年の『告白』（懺悔録）とは、まるで違う。小林は「当麻」で、「ルッソーはあの「懺悔録」で、懺悔など何一つしたわけではなかった。あの本にばら撒かれていた当人も読者も気付かなかった女々しい毒念が、次第に方図もなく拡がったのではあるまいか。」と述べている。これは、ゲエテを引用したところとパラレルである。だから、小林は、その批判として『ゴッホの手紙』を書いたのであろう。私は、一読して以来、うっすらしか記憶していなかったのだが、その要旨は、「ゴッホについて」（新潮 CD）を聴いて、改めて思い出した。

だから、高橋が、小林が、「十一の断章の最初のひとつで、言うべきことを言いつくしてしまう。あるいは、言うべきことが何もないことを告白してしまう、と言おうか。」と述べているのは、大袈裟すぎるわけではないかもしれない。

これ以後も、もちろん文章は続くのだが、末尾で、再び、エピゴーネンを批判している。「日本の音楽批評は、小林秀雄につけてもらった道をいまだに走りつづけている。吉田秀和や遠山一行や船山隆が、まわりくどい文章をもてあそんで何も言わないための「文学」にふけり音楽の新刊書はヨーロッパ前世紀の死者へのレクイエム以外の何もののでもなく……」

しかし、もう若い音楽批評家世代が出てきている。先のアーカイブス「言葉で奏でる音楽―吉田秀和の軌跡」の前・後半に大学教授で、音楽評論家・白石美雪が出演していた。隣には、吉田の教え子で、元Ｎ響のコンサートマスターが座っていた。彼は、もう、70 歳を越えていたし、演奏家だから、これ以上触れない。一方、白石は、吉田が、プロフェッショナルで、クリエイティブな批評で、音楽評論の場を切り開いてくれた。自分も「音楽展望」で、自分の批評を紹介してもらった。しかし、吉田は、自分は、こう思うと対論も載せ、一人前に扱ってもらったと喜んでいた。

番組の中で、吉田と対談していた作家・フランス文学者・堀江敏幸は、対等で、穏やかに、音楽批評に相撲やひびの入った骨董（1983 年来日・演奏したホロビッツのこと）などの比喩について話しかけ、最後に、「（吉田が）晩年になるほどが透明度が出てきた」と感想を述べていた。後半の白石は、吉田の方法は「生身の感じから始めて、納得がいったら、批評を始める人だ」と感想を言っていた。そして、批評家とは、「音と言葉を通じて、人と人をつないでいく、コミュニュケーションの媒介者」と述べ、それには「自分自身を高めていくしかない」「成長を続けなければならない」と吉田亡き後の心構えを述べていた。

これを、聴いて、高橋は、どう思うだろうか。

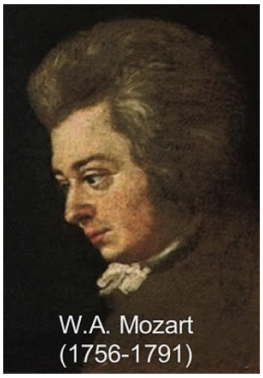
これで、一段落したいのだが、この茂木健一郎の言葉も言っておかなければならないだろう。彼は、吉田を「あこがれの人」「音楽の守護神」「存在しているだけで、日本の音楽が支えられているような方」とべたぼめしている（お世辞でもここまでは言わないだろう）のが、気になった。

また、先祖返りかと思わざるをえなかった。

一読者として感想を書いたのだが、何が批判できたか、はなはだ、心もとない。ところで、音楽批評とは、演奏を比喩（直喩・暗喩）を用い、そして、〈美文〉で表現して、読者に、あたかも、演奏を聴いたような気にさせるものなのか。新人を発掘することなのか。しかし、音楽批評は、言葉が不可欠だ。すると、音楽批評は〈文学〉の一種になりはしないか。楽譜を載せて（音楽家だと理解は少し違うだろうが)、どんなに音楽らしくしても、そこで語られるのは、やはり、言葉ではないだろうか。それによって読者をわかったような気にさせる。小林が、やったのは、まさに、それであるだろう。

私は、やっと、小林秀雄の『モオツアルト』がわかったような気がする。私は、あの〈比喩と美文〉（先人の表現を盗用した）に酔っていたのだ。と、いうより、モーツアルトという名前に心が騒いだのだ。『本居宣長』を読んだ後、すぐ読んだのが『モオツアルト』だった。モーツアルトという名前からは既に、甘美な響きが聴こえて来たのだった。モーツアルトの音楽は、音楽だ。私は、それが好きだ。それにのめりこんだりしている。しかし、小林の批評は、印象批評ではないのか。おそらく、ボードレールなど若い頃に影響を受けた近代批評の影響があるのだろう。小林は、「日本の批評家で影響を受けたのは、正宗白鳥だけだ」（新潮 CD）と言っているから。多くの人が、『モオツアルト』には、誤りがあると言っているのに、私は、それを無視とまではいかないけれども、黙殺してきたことは事実である。すぐれた〈比喩と美文〉に惑わされていたのだろう。別の言い方をするなら〈かっこいい〉とでも思っていたのだろう。例えば、「モオツアルトのかなしみは疾走する。涙は追いつけない」とか。私なら「モーツアルトの音楽は転調する。それに聴衆は驚愕する」とでも、言い返そうか。

最後に、ふと、思い出したのが、晩年、小林秀雄が、友人の河上徹太郎に「我々の芸術批評は、あれで良かったのだろうか」と言った？という言葉である。この典拠は思い出せないのだが、私の夢だったのだろうか。小林や河上のエピゴーネンが続出してきたことへの反動だろうか。とにかく、30 年の空白は無化されたと思うのだが。それは、最終的には、読者である、あなたの判断だ。（了）




# 大阪哲学学校入会案内

大阪哲学学校は 1986 年に「生活と哲学の接点」となることをめざして開校した、市民による開かれた自主的な文化運動団体です。思想信条を問わず、対話と学びを望む方であればどなたでもご参加いただけます。哲学学校を維持するために、会員になっていただける方を随時募集しています。年会費は２千円で毎年１月に更新です（７月以降入会の方はその年の年会費が半額)。会員には、企画を提案したり運営委員になって会の運営にたずさわることができるほか、ホームページの会員専用ページから各回催しの配付資料をダウンロードできるなどの特典があります。会員登録は、催し会場受付にてお申し出いただくか、メール（oisp@mac.com）でご連絡ください。

# 大阪哲学学校活動日誌（「通信」44 号発行以降）

2012. 1.21. 2012 年度総会＆新年・会員参加者交流会
1.21.『大阪哲学学校通信』第 44 号発行
2.11. 講演「市民社会と歴史の集合的記憶―３．１１で問われる日本人の歴史認識」
……講師・斉藤日出治
3.10.〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む ……講師・田畑　稔
第 19 回「カントと道徳的世界観」
3.24.〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む……講師・田畑　稔
第 20 回「良心、美しき魂、悪と赦し」
4.14.〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む……講師・田畑　稔
第 21 回「宗教　A　自然宗教」
5.26. 2012 年度開講の集い
話題提供１「宗教の信仰と唯物論の信念についての一考察」（藤田隆正）
話題提供２「無神論とスピリチュアリティのブックレビュー」（平等文博）
6.30.「高根英博さんの『アントニオ・グラムシ』出版記念の集い　於・ギャラリー星座
記念講演・藤岡寛己、高根英博
7.28.「人類学・霊長類学から捉える『人間観』」　……講師・小野英理
8.25. 2012 年度夏期シンポジウム（大阪唯研哲学部会、季報唯研刊行会と共催）
シンポジウム１「唯物論研究会 80 周年―『道徳論』をめぐって」
報告１「戸坂潤のモラル論」（藤田隆正）
報告２「岡邦雄のモラル論」（藤井祐介）
シンポジウム２「橋下政治をどう見るか」
報告１「戒告処分と不服申し立ての経緯」（奥野康孝）
報告２「ピース大阪『再編』について」
報告３「橋下政治とポピュリズム政治」（田畑　稔）
参加者によるリレートーク
交流会
10. 6. 連続講座「現代を生きる倫理」　……講師・藤田隆正
第１回「人間存在の根源としてのマルクス倫理―「分かち合い」と「尊厳」」
11.10. 連続講座「今、中国の政治と経済、社会は……」
第１回「現在の中国をどう見るか」　……講師・加々美光行
11.24. 連続講座「現代を生きる倫理」　……講師・木村倫幸
第２回「態度（common）としての民主主義」
12. 8. 連続講座「現代を生きる倫理」　……講師・平等文博
第３回「スピリチュアル、スピリチュアリティをめぐって」
12.22. 連続講座「現代を生きる倫理」　……講師・田畑　稔
第４回「今、ここの「知的モラル的改革」」
2013. 1.26. 連続講座「今、中国の政治と経済、社会は……」
第２回「国家資本主義経済のゆくえ」　……講師・山本恒人
新年・会員参加者交流会
2. 9.〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む ……講師・田畑　稔
第 22 回「芸術宗教（古代ギリシャの宗教と芸術）について」